撮影場所◎一般社団法人やまがた福わたし（山形市）

奏であう人 vol.67

誰もが安心して暮らせる地域を目指して

世代や境遇を超えて交流できる、地域食堂を運営する小川さんとフードバンク活動を通し、食の支援を手がける伊藤さんに誰もが安心して暮らせる地域づくりのお話をお聞きしました。

伊藤 智英（いとう ちえ）さん（山形市）

昭和43年生まれ。東根市出身、山形市在住。ベトナム旅行の際、物乞いをする幼い姉妹を見たことをきっかけに、自身が社会のためにできることを模索し始める。2016年より家庭や企業で余っている食材を集め、必要としている人に届ける「フードバンク」の取組みを始め、後に「一般社団法人やまがた福わたし」を設立。14名のボランティアスタッフとともに、活動を行っている。

扱う食材は米や調味料をはじめ、火を使わずに調理できるものまで多岐にわたる。食材の在庫や賞味期限などのデータは二次元コードで管理され、届け先の家族構成や経済状態に合わせて詰め合わせの内容を変えながら発送される。

小川 真実（おがわ まみ）さん（高畠町）

昭和62年生まれ。南陽市出身、高畠町在住。中学校の頃からボランティア活動に参加し、現在は南陽市社会福祉協議会に勤務。南陽市青年教育推進事業で出会ったメンバーと青年グループ「Zu-Zu-Z」を結成し、2021年より「あまやどり」の名で地域食堂を月2回開催。食の支援のほか、ケーキづくりやフラワーアレンジメントなど参加者が交流できる企画も行っている。

お弁当のおいしさや栄養バランスはもちろんのこと、お腹を満たすと同時に笑顔になってもらえるように必ずデザートを付けるなど、提供する食事の内容に気を配っている。

日常からは気づけない貧困の存在を知って

「山形は貧困とは無縁。事業をはじめる前は、そう思っていました」。

伊藤さんは自身ができるボランティアを探すなか、1日1食の子どもや弁当を持っていけない子どもが山形にもいることを知り、フードバンク活動をはじめる決意をしたそうです。

「今では、年間15トンの食料を預かり、約800世帯の必要な方へと届けられています。これほど助けが必要な方がいることは、この事業をしなければ気づけなかったかもしれません」。

社会福祉協議会で働く小川さんもまた、コロナ禍で生活に困っている方を目の当たりにしました。

「せめて食で支援はできないものかと、所属する青年グループのメンバーと共に、さまざまな世代や境遇の方が安心して利用できる地域食堂を始めました」。

地域食堂の開設から1年が経つなか、賛同してくださる個人の方や企業が増え、今では一度に120食ものお弁当を提供しているそうです。

「準備は大変ですが、”おいしかったよ“”あなたの顔を見にきたよ“と利用者の方から笑顔で声をかけてもらえることが、活動の原動力になっています」。

小川さんの言葉に共感した伊藤さんが言葉をつなぎます。

「食べ物は、お腹だけでなく心も満たしてくれると思います。食材を届けた先の子どもさんから”僕も大人になったら、困っている人を助けることがしたい“とうれしい言葉をもらったことが忘れられません」。

お腹いっぱいのおいしい食事で誰一人取り残さない社会を目指す

一方で抱えている課題もあると小川さんが話します。

「地域食堂という活動自体、知名度の低さもありますが、生活に困っている方の利用はまだ少ないように思えます。支援を受けることへのためらいがあるのかもしれません」。

見た目からは生活苦の有無がわからない時代。支援が必要な方には多様なアプローチが求められていると伊藤さんは話します。

「食で支援する活動は、広域連携によりさらに意味があるものになります。例えば、私たちが置賜に根ざしている団体と連携することで、活動がより活発にでき、置賜で支援を必要としている方にも食材を届けることができるのです。さまざまな団体が連携し、支援の輪が県内全域で広まれば、誰一人取り残さない社会の実現に近づけるのではないでしょうか」。

団体ごとに取組みこそ異なりますが、目指す方向は同じ。手を取り合って進むことで、新しい未来が開けるのかもしれません。

「何が起こるかわからないのが人生。困ったときはお互いさまです。私たちの届ける食材が受けとった方の”福“となり、生活を支え、再びスタートを切るための一助になればうれしいです」。

伊藤さんの言葉を受けて、小川さんが続けます。

「同じ県に住む者同士、お互いさまという気持ちを育んでいきたいですね。私たちの地域食堂も、〈あまやどり〉という名前に込めたように、困っている方が気軽に立ち寄り、ひと休みできるような場所になれればと思います」。